

中国に民主・民族革命を

昨年十二月、北アフリカのチュニジアで、路上で野菜を売っていた青年が警察の摘発に抗議して焼身自殺した。同じように失業や物価高に苦しむ若者たちがこの事件に触発され、今年一月二十三日にチュニジアの独裁政権を倒し、二月十二日にはエジプトのムバラク政権を倒し、今はリビアに四十年の長きにわたり君臨したカダフィ政権を倒そうとしている(二月二十三日現在)。のみならず、このアラブ民主化の津波は大西洋岸のモーリタニア、モロッコからアラビア半島を越え、カスピ海に臨むイランに至るまでの北アフリカ十三カ国に拡大している。

世界中の独裁国家はこの波の波及を阻止しようと懸命だが、中でも独裁体制のまま超大国への道を進みつつある中国への影響は深刻である。二月二十一日の新聞各紙は、インターネットによる中国十三都市での集会呼びかけで集まった活動家などと、強制排除しようとする警察官とが揉み合う様子や、北京市中心街に展開する大治安部隊の写真を掲載した。記事中で傑作なのは、公安当局のブロックで中国のインターネットでは「茉莉花(モーリーホワ、ジャスマインの花)」の語の検索ができなくなっているが、これはチュニジアの政変が「ジャスマイン革命」と呼ばれるためで、そのあたりで二〇〇六年に訪問先のアフリカ・ケニアで中国の歌「茉莉花」を歌う国家主席・胡錦濤の映像は、「私の故郷の歌です、たくさん歌ってください」との自身のコメントにかかわらず、現在は見るできないという(二月二十二日付朝日新聞)。

非漢族の中国人留学生、つまり少数民族出身の留学生たちによれば、日本に滞在中の漢族留学生のほとんど全員は民主化支持だという。外国に出て、自国の経済発展に胸を張ると同時に、政治的には後進国としての引け目を感じ、同族の劉曉波氏がノーベル平和賞を受賞したこともあってのことだろう。

早晩、中国は民主化の洪水に襲われるに違いない。しかしこの時期に、中国の漢族留学生と非漢族留学生の一部との間に、尖锐な亀裂が拡がりつつあるのは異様である。つまり漢族留学生が民主化を待望するのに対し、漢族主導の民主化はかえって自民族に対する圧迫強化になりうると懸念する非漢族留学生は、中国が民主化で大混乱に陥るそのときこそ、民族独立を実現する千載一遇のチャンスと考えている。辛亥革命から始まった中国近代化の過程は、毛沢東の共産革命により、全中国の奴隷化として篡奪され、中絶させられた。今日の漢族による民主革命、非漢族による民族革命は、その中絶させられた中国近代化を正統に再開する歴史的試みである。その動向に注目し、日本の国益にかなうよう、支援し誘導してゆくべきだ。(平成二十三年二月二十三日)

政治学者 殿岡昭郎